

本間久雄 著

日本文學全史 卷十二

新訂

續明治文學史

上卷

東京堂刊行

昭和二十五年九月二十五日 初版印刷
昭和二十五年九月三〇日 初版發行

新訂 續明治文學史 上卷

定價 五五〇圓

著者 本間 久雄

發行者 大橋 勇夫
東京都千代田區神田神保町一ノ一七

印刷者 松浦 元
東京都新宿區改代町二四

發行所 株式會社 東京堂
東京都千代田區神田神保町一ノ一七

電話神田(25)〇八八五—〇八八八
振替 東京 二七〇

理想社印刷

新訂版序

本書は、昭和十八年十月刊の『續明治文學史』上巻を、その全體にわたつて魯魚の誤ちを正し、且つ、ここかしこ、訂正を施したものである。

本書はもと、前に公けにした『明治文學史』上下二巻とは、その對象の取り扱ひ方において、いささか、趣きを異にしてゐる。そのことについて、稿者は、舊刊の本書序文において、次のやうに述べたのであつた。

「稿者は、本書を書き了へて、特に二つの點で、大きな悦びを感じる。一つは、本書において取り扱つた個々の作品そのものから享受し得た鑑賞の悦びである。明治の文學を、開化期、黎明期、興隆期と年代の順を追つて研究の對象とする時、その各々の時期における文學の、吾々に齎らす味ひは、夫々、異つたものであること、同時に又、吾々の研究の態度も亦、夫々の時期において、おのづから異つたものであるべきことに氣がつく。

開化期は、拙著『明治文學史』上巻の序でも述べた通り、史的資料の蒐集と整理の時代であつた。従つて、研究者の態度も、文藝鑑賞家のそれと云ふよりは、むしろ、より多く、史的考證家のそれ

を必要としたのであつた。年代の下るに従つて、態度上のこの關係は、異なるものとなつて來る。無論、資料的に、まだまだ未整理に残されてゐるものもないではないが、それ自らにおいて、その文學的價値を要求する文學作品の方が、次第に、より多くなつて來たからである。アナトオル・フランスは、文學批評を以て、作品の中に試みられた魂の冒險を快く語ることであると云つた。蓋し、本書は、稿者が、明治二十年代末葉以後の名作佳什の間に逍遙して試みた魂の冒險の悦びと、並びにその悦びの如何なるものであるかと云ふこと、及び、その悦びが、どこから來たかと云ふことを、興隆期の文化的諸情勢、諸思潮と聯關して解説しようとしたものである。」

稿者は、次に、もう一つの悦びについて、それが「わが國民性の持つ一つの卓越性——包擁力の大きさと云ふこと、消化力の強さと云ふこと、創造力の豊かさと云ふことを、この期の文學作品を通して會得した」ことであるとなし、その意を次のやうに述べたのであつた。

「明治維新は、拙著『明治文學史』上卷で詳説した通り、福澤諭吉の所謂始造であつて、何もかも新しく建設したのであつたが、その建設に方つて、その範として取り入れたのが泰西の文化であつた。しかし、わが國は、彼方において、幾世紀を費して贏ち得た文化を、僅々、半世紀足らずの間に、或る程度消化し、そしてそれを、一つの榮養素として、全く新しい、わが國独自の文化を創造したのであつた。蓋し、このことを、一つの具體的な事實として證明するのが明治の文學である。

明治の文學は、事實、そのことを度外視しては、少なくともそれを十全に理解し得ないほどの影響を泰西の文學から受けてゐる。しかし、その影響の悉くを、明治文學の先覺者たちは、わが國古來の傳統文化の坩堝かっごの中に入れて瀟過し、淨化し、かくして、全く新しい、日本独自の文學を創造したのである。稿者は、本書に細論した興隆期文學の諸現象において、特に、この感を深くし得たことを、この上なく悦ぶものである。」

本書の舊版において述べた以上のことは、今日においても稿者に取つて恐らく變ることのない感懷である。尤も、わが國が、彼方において、幾世紀を費して贏ち得た文化を、僅かに半世紀足らずの間に、わがものとしようとしたことには、今日から見ると、そこに、當然に、何等かの無理のあつたことは容易に推測し得ることである。従つてわが國が、泰西の文化を、文字通りに消化し得たか否かは疑問である。しかし、わが國が、外國の文化との關係において、他の長を採り、吾が短を補ふと云ふことは、すでに芳賀矢一が、その『國民性十論』の中で、いち早く論證してゐるやうに、わが國民性の一つの、且つ重要な特徴の一つである筈である。そして、他の長を採り、吾が短を補ふ場合、われの心構へのいかにあるべきかと云ふこと、並びに、その方法亦、いかにあるべきかと云ふこと——それらについての再検討こそ、今日の吾々に取つての最重要な課題の一つであるべき筈である。本書において研究の對象とした明治文學の諸現象、諸作品は、この點で、恐らく吾々に

多くの反省の資料を提供するであらう。

なほ、本書は、既刊『明治文學史』——特にその下巻と并せ讀まれることを希望する。本書の論述と最も密接な部分でありながら、上記下巻において説いたところは、本書において、それを再びすることを、わざと避けたからである。本書は、全く文字通りの意味において、既刊の續篇なのである。又、本書は、やがて出づべき中下の二巻と并せ讀まれることを希望する。本書において、當然説くべくして、而も紙數其他の都合上、わざと次の巻に廻したところも多いからである。

本書の校訂並びに索引の作製については、前二巻とおなじく、石丸久君に負ふところが大きかつた。銘記して、同君の勞を深謝する。

昭和二十五年初秋

著 者 識

目次

興隆期 續篇

第一編 新體詩

第一章 傾向及び問題

第一節 新體詩形態論

(イ) 『新體詩歌集』の問題

(ロ) 島村抱月の詩形論

第二節 朦朧體是非

(イ) 高山樗牛の朦朧派論

(ロ) 抱月の批評とその「朧」観

第三節 古語對俗語

——井上巽軒の『新體詩論』——大町桂月の反駁——

第四節 押韻問題

(イ)	正岡子規押韻論	二六
(ロ)	島崎藤村の『雅言と詩歌』	三二

第五節	叙事詩問題	三五
-----	-------	----

(イ)	叙事詩要望	三五
(ロ)	『比沼山の歌』其他	三六

——『高麗野の夜嵐』——『那智籠』——『世繼の歌』——子規の批評——

第六節	抒情詩	四〇
-----	-----	----

(イ)	『抒情詩』	四〇
-----	-------	----

——田山花袋所説——『野邊のゆき』——『花ふじき』——獨歩・湖處子・嵯峨の屋——

(ロ)	國木田獨歩の自由詩形論	五一
-----	-------------	----

——『山林に自由存す』其他——

第七節	宗教詩の問題	五一
-----	--------	----

(イ)	詩と宗教	五一
-----	------	----

——植村正久所説——

(ロ)	『涙痕集』	五八
-----	-------	----

第八節 新體詩振興策

(イ) 抱月の二提案

(ロ) 詩壇分派

——大學派——早稻田派——民友社派——文庫派——

第二章 詩人 群

第一節 島崎藤村

(イ) 『若菜集』以前

(ロ) 藤村と其時代

(ハ) 泰西文學の影響

(ニ) 特色——其一

——情意解放——浪漫的憂鬱——自然觀照——

(ホ) 特色——其二

——藝術至上——人生肯定——

(ヘ) 形態上の特色

第二節 土井晚翠

(イ)	晩翠詩觀	六
(ロ)	特色	一〇〇
	——「永遠の思索」——「闇と光」——	

(ハ)	晩翠の理想觀	一〇四
(ニ)	『鷲』鑑賞	一一〇
(ホ)	英雄詩的譚歌	一二四
	——『星落秋風五丈原』——『馬前の夢』——	

第三節	薄田泣菫	一二七
-----	------	-----

(イ)	『暮笛集』と『ゆく春』	一二七
(ロ)	特色——其一——	一二三
	——時代病的憂鬱——悲戀的情調——	

(ハ)	特色——其二——	一二九
	——至醇純雅——藝術至上觀——	

(ニ)	藝術至上觀	一三四
	——『石彫獅子の賦』鑑賞——	

(ホ)	古語復活	一四五
-----	------	-----

第四節	武島 羽衣	一四九
-----	-------	-----

(イ)	羽衣措辭論	一四九
-----	-------	-----

(ロ)	その古典主義	一五〇
-----	--------	-----

(ハ)	譚歌『小夜砧』	一六〇
-----	---------	-----

第五節	與謝野鐵幹	一六三
-----	-------	-----

(イ)	大町桂月の鐵幹論	一六三
-----	----------	-----

(ロ)	新詩體創始	一七一
-----	-------	-----

第六節	花外と臥城	一七五
-----	-------	-----

(イ)	情熱の詩人花外	一七五
-----	---------	-----

(ロ)	吉野 臥城	一八
-----	-------	----

第七節	天遊と天來と敬天牧童と	一八七
-----	-------------	-----

(イ)	三木天遊の特色	一八七
-----	---------	-----

(ロ)	——『廉恥』鑑賞——	一八七
-----	------------	-----

(ハ)	『笹舟』	一九六
-----	------	-----

(ニ)	繁野 天來	一九六
-----	-------	-----

目次	敬天牧童詩觀	二〇五
----	--------	-----

(木) その特色……………

第二編 劇文學……………

第一章 傾向及び問題……………

第一節 「劇海風潮」……………

第二節 史劇本質論……………

第三節 逍遙對樗牛……………

——逍遙『史劇についての疑ひ』——樗牛『歴史畫の本領及び題目』——逍遙『藝術上の所謂歴史的といふ語の眞義如何』——論爭是非——

第四節 小説脚色化問題……………

第五節 近松復活……………

第六節 新氣運……………

——正劇『オセロ』——『江戸城明渡』——

第二章 代表的戲曲家……………

第一節 坪内逍遙……………

(イ)	『桐一葉』	二四五
-----	-------	-----

——梗概——

(ロ)	『桐一葉』是非	二六〇
-----	---------	-----

——鷗外評——樗牛評——

(ハ)	逍遙悲劇觀	二六四
-----	-------	-----

(ニ)	『牧の方』	二六八
-----	-------	-----

——森田思軒評——樗牛評——

(ホ)	『杏手鳥孤城落月』	二七三
-----	-----------	-----

——その文學的價值——

第二節	森鷗外	二七六
-----	-----	-----

(イ)	戲曲家態度論	二七八
-----	--------	-----

(ロ)	『玉篋兩浦嶼』	二八一
-----	---------	-----

(ハ)	その思想的意義	二八九
-----	---------	-----

(ニ)	『日蓮聖人辻說法』	二九三
-----	-----------	-----

第三節	高安月郊	二九七
-----	------	-----

(イ)	月郊小傳	二九七
-----	------	-----

(口)	『重盛』	三〇一
(ハ)	『櫻時雨』	三〇六
(ニ)	その傳統美	三三三

第三編 小説

第一章 小説壇の人々

第一節	尾崎紅葉	三六
(イ)	『心の闇』	三六
(口)	『多情多恨』	三三二
(ハ)	その文學的價值	三三二
(ニ)	『金色夜叉』	三三七
(ホ)	『金色夜叉』の含む問題	三四六
(ヘ)	紅葉文體の變遷	三五〇
第二節	幸田露伴	三五九
(イ)	露伴文學觀	三六〇
(口)	露伴人間觀	三六三

(ハ)	『風流微塵藏』……………	三六九
-----	--------------	-----

——『さゝ舟』『うすらひ』『つゆくさ』『荷葉盃』『菊の濱松』『獨り寝』——『さんなきぐるま』『あがりがま』——

(ニ)	『風流微塵藏』の特色……………	三八九
-----	-----------------	-----

(ホ)	『天うつ浪』……………	三九五
-----	-------------	-----

(ヘ)	その價值……………	四〇一
-----	-----------	-----

第三節	風葉と鏡花……………	四〇八
-----	------------	-----

(イ)	風葉作品の特色……………	四〇八
-----	--------------	-----

(ロ)	『青　　春』……………	四一八
-----	-------------	-----

(ハ)	その時代的意義……………	四三二
-----	--------------	-----

(ニ)	鏡花の瑰奇味……………	四三七
-----	-------------	-----

(ホ)	『高野聖』の價值……………	四三二
-----	---------------	-----

圖 版

島崎藤村筆『藤村詩集』序文一節	卷首一
薄田泣菫筆『破甕の賦』原稿	卷首一
坪内逍遙筆『牧の方』下繪	卷首二
幸田露伴筆『猿蓑初學抄』原稿	卷首二

挿 畫 目 次

新體詩歌集表紙	四	若菜集表紙	五
正岡子規書簡（河東碧梧桐宛）	二六—元	一葉舟表紙	六
世繼の歌表紙	四三	なつぐさ表紙	七
抒情詩	四四	落梅集表紙	七
田山花袋詩稿	四七	天地有情表紙	九
國木田獨步詩稿	五三	曉鐘表紙	一〇
詩美幽韻表紙	六六	晚翠星落秋風五丈原原稿一部	二五
青年新體詩集表紙	六七	薄田泣菫長文書簡（梅澤和軒宛）一部	二八—二九
島崎藤村（止水筆）	七〇	暮笛集表紙	三三